

## 講演要旨\*

### 北海道東部“豊頃—北見帯”の 新第三系有孔虫化石

(とくに津別一本別間の層序と有孔虫について)

石田 正夫

北海道北東部オホーツク海側の網走から太平洋側の豊頃丘陵にかけての地域は、中生層を基盤として新第三系の地層が顕著に発達している。橋本亘は地質構造および堆積状況から北海道を幾つかの構造区に分けた際に、この地域を一つの構造単元として“豊頃—北見帯”と称している。

豊頃—北見帯地域の新第三系については、従来から本帯中央部にある陸別地域を界として、南部と北部で分布する地層の堆積盆が異なるものとされていた。すなわち、南部地域では釧路炭田地域も含めて、新第三紀の地層は中新世後期になって初めて海進が行なわれたものとされ、これに対して北部では中新世初期ないし中期に海進が行なわれたと考えられていた。北見地域の図幅調査を行なった際に南部地域では中新世後期とされている川上層群と北部地域の中新世初期ないし中期とされている津別層群とが岩相的にも構造的にも良く似ており、同一層準の可能性が強くなった。これを解明するために両層群相互の層序および有孔虫の研究を行なった。層序についてはすでに山口昇一によつて報告されているとおりで、有孔虫の研究からも違いは無く同一層準であることが明らかとなった。

津別地域で津別層群は達媚層と津別層とに2分されるが両層の間は整合であり網走地域の常呂層に連続する。

達媚層は硬質頁岩を主体とし、津別層はシルト岩を主要な構成員としている。達媚層および津別層の下部からは、*Cyclammina*、および *Haplophragmoides* 群集がありすべて砂質有孔虫によつて占められている。津別層中上部になって *Bulimina* や *Eponides* など石灰質のものが多くなり逆に砂質のものが少なくなっている。

陸別以南の足寄一本別地域において、川上層群は下位から本別沢層・仁生層および貴老路層とに3分されている。

本別沢層は板状硬質頁岩を、仁生層は塊状硬質頁岩および凝灰質シルト岩を、貴老路層は泥岩をそれぞれ主体とする地層である。

本別沢層からは達媚層と同様に *Cyclammina* および *Haplophragmoides* を主体とする群集が認められる。ただ本別—常室地域で本別沢層とされている地層の下部に古第三系の縫別層にみいだされるような *plectofrondicularia packardi* CUSHMAN & SCHENCK, *P. packardi multilineata* CUSHMAN & SIMONSON および *Nodosaria* などの石灰質有孔虫を産する。岩相的に縫別層と似ている部分もあるが、この地域の本別層の下部は古第三系に入れられるべきであり再検討の必要がある。

仁生層から有孔虫の産出はきわめて少ないが、含まれているものはほとんどが砂質有孔虫で占められている。

貴老路層は基底に礫岩があり、その上に泥岩が累積する。この礫岩中から *Cibicides* および *Eponides* など石灰質のものが認められる。上位の泥岩部からは *Cyclammina* および *Haplophragmoides* 群集が数多くみられ石灰質有孔虫は比較的少ない。

以上のように津別層群と川上層群とを比較した場合には、層位学のおよび古生物学的にみても堆積盆を異にする要素は認められず、同一層準のものと考えられる。

(北海道支所)

### 石灰岩層の不連続性について

清原 清人

九州地方に分布する比較的大規模な石灰岩層は、北部九州に断続的な分布をなす平尾石灰岩層とその延長部に当るもの、熊本県の中央部を横断して天草上島に至る肥後片麻岩帯中に挟み込まれるもの、および、大分県の津久見方面から熊本県南部に続く秩父系中の石灰岩層が挙げられる。各地域の石灰岩層は、すべて長楕円状の盆状構造あるいは複盆状構造を形成していることがわかった。

津久見方面から熊本県南部に連なる秩父系中の大規模石灰岩層について、熊本県の球磨川地域の文献をみるに、2列をなして並走する巨大な石灰岩層が、延々と続いているものとされている。

演者の調査によると、2列をなして並走している両石灰岩層は、両者とも走向方向への延長2~3kmで盆状構造に移つて終結し、隣接の石灰岩体との間には、基盤地層と推定されるチャートをもとする石灰岩でない地層が、それぞれ、数100m~1kmにわたり実在している。すなわち、長楕円状の盆状構造をなす石灰岩層が、大きい向斜の軸部に沿つて、点々と断続的に配列しているものであることが確認された。

\* 月例研究発表会講演要旨  
昭和42年6月29日本所において開催

塊状岩体をなす大規模な石灰岩層の多くが、地層の大きい向斜のなかにあつて、画一的に盆状構造を形成して、連珠状に続いている。このような石灰岩層は、古生界中のある狭長な地帯に限り、しかも盆地状に堆積をしたものであろう。このような盆状構造の石灰岩層が古い

地向斜内に並んでいたのであるが、後期の造構造運動によつて、向斜の一部を占めたと推測される。

すなわち、塊状岩体をなす大規模な石灰岩層の不連続性は、元来、厚生的性格をもち、単なる断層や侵食のみによつてもたらされたものではない。(九州出張所)